

『東北及東北人』

浅野源吾[著]

東北社刊 / 1915年 / 菊判 / 302頁 / 図書番号 OJ-0559

浅野源吾は、岩手県東磐井郡千厩町（現在の一関市）出身で、地方青年自らの力で東北振興を計るべく、1916年には東北青年聯合会の結成を成功させ、後に東北振興会の理事として『東北振興史』 上中下（1938-40）を編纂するなど多くの書を著わした。

1913年に北海道・東北地方は冷害凶作に襲われ、これを救済すべく発足した第一次東北振興会が義捐金などを贈ったが、十分な効果は挙げられなかった。こうした中で本書は、東北人の不幸なる境遇を明瞭にして自覚を促し、後日の発展に備えることを目的に刊行された。

「第1編 第1章 東北地方の大勢」では、森林政策や産馬、電気事業などについて述べる。森林政策では、東北地方の最大の特徴は、森林面積が全国の約4分の1、国有林は全国の約3分の1を占めるほど広大であることだとし、国は森林保護の全責任を東北に負わせるのではなく、直接利害を以って事にあたる個人への払下げを通じて、開墾や植林などの有効活用を図るべきだとする。

産馬では、東北が我国で最大の馬匹産地であり、仙台馬や南部馬などの優良馬を産出してきたとする。軍馬だけを見ても今後10年間に牡馬約15万頭の不足が予想され、最大産地である東北において約30万町歩の放牧地が不足するので、農務省はその必要性に配慮して国有林の放牧地への開放を認めるべきだとする。

電気事業では、東北6県と水力発電の開祖地ともいべき山梨、長野、新潟、茨城、栃木を合わせた11県について述べる。これらの地は水量が豊富で、全国の水力発電量の約半分を占める。総発電水力は250万馬力であるが、域内での使用は32万馬力に過ぎず、残りの大半は東京で消費されるとする。これは11県の人口希薄と産業不振のためであり、余剰電力を農業用水の灌漑・排水や、電力を大量に使用する窒素肥料などの製造にあてて、地元の産業振興を図るべきだとする。

「第2章 東北最近の金融関係」では、各種銀行の貸出利子が東北では12%と高く、さらに普通金貸業者の20%以上の土地担保高利債務に苦しむ農家が多く、各種銀行の整備と利率の引き下げが急務だとする。

「第4編 東北開発余録」では、東北開発のあり方を述べる。他より姑息の補助を受け、または姑息な依頼心を抱くのではなく、自らの信じる所によって努力奮闘すべきで、そのためには教育を充実させること、自治観念を養成することが大切である。産業の振興を図るのは、その次であるとする。

東北の産業振興策としては、他地方に比べて著しく劣る交通機関を整備すること、寒冷地方に特徴的な家屋構造を漸次改造すること、農家の冬季における副業を奨励することなどを挙げている。農家の副業としては養蚕、養鶏、果樹栽培などがあるが、組合をつくって原料の共同購入や販売拡大に努め、利益の一部は貯蓄すべきとする。産馬奨励策としては、軍馬購買価格を増額すること、公認競馬会に馬券の発行と、ばんえい競馬を認めるように勧めている。

東北の置かれた厳しい状況を指摘しつつ、自ら発展するための努力を力説した書である。

（田村靖広・市政専門図書館副館長）